

令和 2 年 1 月 4 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）留学終了報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

記

1. 報告者情報

| | |
|----------------|------------|
| 所属/学年 | 教育学部 4 年 |
| 卒業/修了 予定年月日 | 2021 年 3 月 |

2. 留学の概要

| | | | | |
|---|-------|-----------------------------------|-------|------------------|
| 留学期間 | 開始年月日 | 2019 年 4 月 29 日 | 終了年月日 | 2019 年 12 月 20 日 |
| 留学のタイトル | | 柔軟性のある教師になり、後生で広く活躍できる子ども達を育てるために | | |
| 留学の目的と概要（実践活動部分には、下線を引いて下さい） | | | | |
| <p>私の留学計画はすべて実践活動である。私には音楽教師になり、多くの子ども達に音楽の魅力を伝えると共に、母国の素晴らしさを伝えたいという目標がある。私の中での「多くの子ども達」とは、日本人に限らない。音楽は言語による壁の存在がなく、他国の人々とコミュニケーションをとるための方法として最適なものだと考える。また、「民族音楽」には、各地域の特徴が盛り込まれており、言葉を交わさずともそれぞれの地域の良さを伝え合うことが可能であると考える。しかし、学生の間でこれらを実践することはなかなか難しく、このまま音楽教師になることに不安を抱いていた。3 年になり、進路も本格的に決めていかなければならない時期に差し掛かったとき、JTA 募集の知らせが入ってきた。その瞬間にこれだと思い応募した。</p> <p>私が JTA を通して身につけたい力や、学びを深め日本に持ち帰りたいことは主に 3 つある。1 つ目は子ども達へのアプローチの仕方である。私は 3 年次に鹿児島市内の中学校で 1 ヶ月間の教育実習を行った。そこで学んだことはたくさんあるが、中でも生徒からの反応については特に印象に残っている。呼びかけを一つ変えるだけで生徒の理解度と反応に多くの違いが見られた。今回 JTA で担当するのは小学生である。中学生とはまた違った反応を期待するが、同時に言葉が通じない場所でのどのように接することが効果的であるのかを試行錯誤していきたいと思う。2 つ目は音楽を使い日本の魅力を伝えることである。私はこの目的を達成するため「さくらさくら」を活用する。この曲は、日本で親しまれている曲でありさらに日本が持つ和の雰囲気を感じ取ることができる。また、日本の四季や桜についても紹介することができ、日本の魅力を伝え、興味を持ってもらいたいという狙いがある。3 つ目は他国の教育を知ることだ。実際に現地に行きオーストラリアの教育を目の当たりにすることによって日本との違いを観察し、良い取り組みや興味深いものを日本に持ち帰り、今後の教育に活かしたいと考える。</p> | | | | |

3. 受入れ機関情報及びスケジュール

(1) 受入れ機関情報

| | 1ヶ所目の機関 | 2ヶ所目の機関 | 3ヶ所目の機関 |
|---------------|---------------------------|---------|---------|
| 国・地域 | オーストラリア | | |
| 都市名 | キャンベラ | | |
| 機関名 (英語) | Arawang Primary School | | |
| 機関名 (日本語) | アラワン小学校 | | |
| 受入れ 機関 URL | www.arawangps.act.edu.au/ | | |

(2) 留学期間中のスケジュール 留学月数 (8) ヶ月 / 授業料申請 (有・無)

| 年 月 | 留学先機関 | 国・地域 | 主な活動 |
|-----------------|---------------------------|-------------------|--------------------------------------|
| 2019年4月 -12月 | Arawang Primary School | オーストラリア・ キャンベラ | オーストラリアのアラワン小学校で 日本語教師のアシスタントをする。 |

(3) 参加したプログラム (有・無) (複数選択可)

| | | | |
|-----------------------|---|------------------------|-----|
| 本学の協定校交換留学 | — | 本学の協定校交換 留学以外のプログラム | JTA |
| 本学以外の機関に よる留学プログラム | — | | |

4. 留学の成果及びその測定方法

| 成果発表 (論文、作品等) | ○ | 単位取得 | | 外国語能力 | ○ | その他 | ○ |
|--|---|------|--|-------|---|-----|---|
| <p>成果発表：私は、帰国後 1 ヶ月以内に大学の講義室を使い、鹿児島大学学生及び教授に、留学を経て得た経験や、学んだこと、ぜひ取り入れてほしい教育方法などをプレゼンテーションする。</p> <p>測定方法：帰国後、TOEIC (国際コミュニケーション英語能力テスト) 及び、実用英語技能検定準1級を受験し、リスニング・リーディング・スピーキングの英語力達成度を確認する。TOEIC は、初受験であるが、990 点満点の内、英語教員に必要とされている 750 点を目指す。</p> | | | | | | | |

※当てはまる項目に○を付し、具体的に説明して下さい (複数回答可)

5. 上記 4. も含め、留学の目的がどのように達成できたか、留学で得たことは何か記述してください。

| |
|---|
| <p>今回の留学を通し、確実に身についた力がある。それは、英会話力と表現力だ。8ヶ月間英語に囲まれた生活を送ることができ、聞く力・話す力を大いに伸ばすことができた。これらの力を、実用英語技能検定や、TOEIC を通して目に見える形で証明するため、試験に向けて勉学に励んでいる。</p> <p>また、表現力に関してだが、何度も何度も生徒の前で授業や話す機会をいただけたおかげで、自分が伝えたいと思っていることを、よりわかりやすく丁寧に伝えられるよう、聞き手の年齢や理解力に応じて、言葉を選んだり、話すスピードを工夫したり、どんなに大勢の前でも落ち着いて話や、授業を展開させることができるようになったと考える。また、急な変更・突拍子もない質問などにも落ち着いて丁寧に対処することができるようになったと思う。私は、再来年度の鹿児島県教員採用試験合格に向け、日々勉学に励んでいる。教育や、一般の知識ももちろん大切なことではあるが、教育現場において臨機応変に物事に対応できる能力というものは、欠かせないものである。異国の地で学校教育に携わっていく中で、たくさんの経験と知識を得た。この貴重な経験を今度は形に変え、再来年度、鹿児島県の教育現場にてしっかりと活かしていきたい。</p> |
|---|

6. 留学後に行う鹿児島地域を活性化する活動について述べてください。

2020年1月28日に、教育学部の講義室にて私がオーストラリアで経験したことを元に、来年度教員になる学生及び、鹿児島大学教育学部の教授にプレゼンテーションを行う。特に来年度から初等教育にて、外国語活動が行われる。しかし、来年度教員になる予定の学生からどのように外国語活動の授業を行えば良いかわからないと言う声を多数聞いた。そこで、今回のプレゼンテーションを通し、英語を使った授業がどのように行われていたのかを紹介したいと思う。私のプレゼンテーションを通じて英語を用いた授業展開についてのイメージを持っていただければ、来年度それぞれの教育現場で活かしていただくことができるのではないかと考えると同時に、今まで外国語や英語に馴染みの無かった小学生達が、英語ってカッコいい、たのしい、面白いなどといった感情を持ってくれることを期待する。また、鹿児島市で行われている学校支援ボランティア事業にも積極的に参加をし、オーストラリアの小学校で経験した授業展開を、鹿児島市の小学校の外国語活動にて再現することが出来たらと考えている。

7. 留学を今後の自分の生き方にどのように活かすか、留学成果を活用して将来鹿児島地域に貢献できることは何か記述して下さい。

留学後、私は鹿児島県の子ども達にボランティア活動を通して、オーストラリアで見た教育を取り入れながらより活動的で実践的な学習が行えるよう努めていきたい。実際に鹿児島市では教育に関する学校支援ボランティア事業があり、そのような事業に積極的に参加をする。また、鹿児島県の中等音楽教員を目指し勉学にも励む。私は、将来音楽の教師になり活動的で活発的な授業を行いたいと考えている。音楽を学ぶ上で重要なことは表現することである。礼儀正しく、何かと遠慮しがちな日本人の性格は、高評価される場面もちろんあるが、音楽を学ぶにあたっては今一つ積極性に欠けていると思う場面が、実際に教育実習を行って見受けられた。どのように授業を行えば、子ども達を音楽の楽しさの中にうまく巻き込み、活気あふれる空気を作ることが出来るか時間をかけて考えたが未だに模索中である。しかし、海外の教育に目を向けることで、日本では見つけることができなかった新たなアイデアに出会うことが出来た。海外で取り入れた新しい授業のアイデアを日本に持ち帰り、教師になってしっかりと反映させていきたい。また、最近では「アクティブラーニング」が重要とされる教育方針が増えている。生徒の話し合いへの積極的な参加や、活発的な話し合い活動を促す雰囲気作りや呼びかけも、オーストラリアの教育から学ぶことが出来た。教師になるきっかけを与えてくれた鹿児島県で海外留学を経て、教師になることで、たくましく、積極性を持った子ども達を育てたい。

令和 2 年 2 月 24 日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）
留学後地域活性化報告書

1. 報告者情報

| | |
|------------|------------|
| 所属/学年 | 教育学部 4 年 |
| 卒業/修了予定年月日 | 2021 年 3 月 |

2. 留学後の鹿児島地域を活性化する活動の概要を、留学の成果との関係がわかるように記述してください。

【活動のタイトル】私の経験を紹介することで将来の教員像に幅をもってもらえるように

【活動の期間】2020 年 1 月 28 日

【活動の概要】

2020 年 1 月 28 日に、普段お世話になっている音楽専修日吉武教授の音楽科教育Ⅱの講義にてプレゼンテーションを行った。この講義には初等から高等学校の教師を目指している学生が受講している。今回私は自分の体験について、将来教員を目指している学生に対しプレゼンテーション形式で発表した。オーストラリアの公立小学校の仕組み、1日の流れ、教育や指導の違いなどを主に紹介した。オーストラリアでは、「褒めて伸ばす、褒めてやる気にさせる」というような教育が日常的に行われている。学校という場所が、生徒にとって「楽しい」と思える場所でないといけないと私はオーストラリアの先生から教えてもらった。例えできないことがあったとしても、そこまで頑張ったという過程を褒めることそれが大事だと教えてもらった。日本の教育は、やはり競争社会ということもあり、保護者や教師、それから友人からのプレッシャーや、圧力を感じてしまうことが多々あるだろう。そのプレッシャーにストレスを感じ、学校嫌い、勉強嫌い、さらには不登校という問題を生み出してしまうことも少なからずあると思う。国柄、競争社会というのはどうしても仕方がないことでもあるし、競争社会だからこそ頑張れることもある。だが、その波に押しつぶされそうになってしまう生徒に声をかけ、サポートするのが、教員の役目ではないかと思う。そのヒントを今回のオーストラリアでの体験を通して得ることができた。そしてそのヒントを将来教員を目指す学生に対して紹介することによって、より柔軟な考えを持った教員が少しでも増えてくれると嬉しい。

3. 鹿児島地域を活性化する活動の成果と今後の課題と展望について述べてください。

今回、鹿児島で教員を目指している学生を対象に自分の体験をプレゼンテーションし、伝えられたことは、教育の視野を広く持ってもらおうという意味で今後の鹿児島地域の教育を担う学生に良いフィードバックを行うことができたと思う。実際プレゼンテーションを終えた後、海外の教育に興味を示してくれた学生もおり、様々な教育の在り方を知ることで、私も含め、プレゼンテーションを聴いてくれた学生も教育に対する視野が広がり、様々な方面から子供たちへアプローチできる引き出しが増えたのではないかと考える。

また、私が鹿児島で教員になったおりに、続けていきたいことがある。それは、海外の教育と日本の教育を比較しながら教育研究を続け、子供たちにフィードバックするということだ。具体的には、オーストラリアと日本を比較することになるが、毎年、夏休みにオーストラリアへ渡り、数日間オーストラリアの小学校にて教育を参加観察させていただこうと考えている。日々どのような言葉かけや、授業内容、取り組み、その他のアプローチによって、子供たちはどのように成長しているのか、観察し、日本に持ち帰り、比較を行い、取り入れられる部分はできるだけ取り入れ、授業でフィードバックを行うことはもちろん、研究を続けていく中で、他の教科及び校種の先生方をお招きして研究の成果を発表できる場を設けたいと考えている。また、残り一年の学生生活の中で、八幡小学校や、鴨池小学校が行っている学校ボランティアに参加をし、子供達がいきいきと学校生活を行えるようサポートしたいと考えている。